

「世界の平和を考える」シリーズ第6回

音楽家から見える世界

笠松 泰洋

私は、一人のフリーの作曲家/音楽家であり、政治学者でも歴史家でもありません。私の感じることは全て主観に過ぎないし、きっと情報も偏っている面もあるかもしれません。世界の平和を正面から論ずる立場ではない、ということをお断りしておきます。

ペルーのカルテットメンバー
& トレーナー、ケーナ奏者とオペラ「人魚姫」出演者と
in ウィーン (筆者・左)

チリのサンチアゴにて出演者と



2年前の文化交流使の時には、初めて自分がプロジェクトの中心人物として多くの海外の方々関わって、大きなことに気が付きました。それは、少なくとも音楽、そしてアートは、人種や習慣、宗教や教育といったものより、より根源的な人間という種族に根ざしたものであり、そこではそういった人間が学んで取得するものに関係なく、人々は心から共感が出来る、ということです。

音楽で伝えたい気持ち、場面、価値観というものは、言語化されなくても存在するものです。寒い、暖かい、恐怖、安心、愛情、憎悪、痛み、快楽、美しさ、醜さ、そういったものが複雑に構成されて、アート作品は出来上がっています。

南米でもロンドンでも、曲が何を表すかを説明すると、演奏家の方々は、まさにそれだ！という音を出してくれるのでした。どんな場面でどんな感情を掻き立てるか、が最も重要なのですがその理解に関して、日本と南米、日本とイギリス、オーストリアで何の違いもなかったのです。

私が若い頃、いろいろな人生の選択肢がある中で音楽を選んだのは、音楽をやる際に自分は最も正直になれると思ったことがありました。どう取り繕ったところで師匠には見抜かれました。結局、人間としての姿がそのまま音楽には反映されると感じざるを得ませんでした。この世的にうまく立ち回って社会的に成功しようが、大きな経済力を得ようが、その人が作った曲、奏でた音が人に届くかどうかは全く関係がないのです。高い学歴も経歴も関係ないのです。アートにおいては人は平等だし最もニュートラルに結果が出る、と思ったのでした。

現在の世界の対立、平和と逆の方向に人間の集団が進む際には、人間の過剰な欲、そして、人間の組織を営む際の政治力学が大勢を決定しているように思えます。

宗教的な対立も結局は団体の対立です。団体の中では、より原理に忠実な方が力を持ちやすくなります。

そして集団を維持してその中での政治的な上下を維持するために、外に敵を持つという手段が取られ、その延長で戦争が生じるように思います。憎い個人を殺すと犯罪ですが、憎い敵国の人間をたくさん殺すと英雄になります。

宗教的な対立も、集団の利益、立場の拡張のために力を尽くすと、その教義に矛盾していても美化されます。汝殺すなかれ、を教義とする宗教がどうしてこれほど多くの他民族の殺戮を繰り返してきたのでしょうか？

国家主義、民族主義、全体主義と同じことが宗教団体にも生じてしまうからだと思います。芸術も統率され、集団に利することを求められることもあります。しかしそんな中でも、芸術は人間性の根源を持っていれば、そういった体制が無くなっても生き延びます。

私が、ところざわ倶楽部での講義を14年続けているシェイクスピアもそうです。当時の宗教と政治の体制により排除されないぎりぎりの線のところで作品を生み続け、それは、今読んでもあらゆる人間に当てはまる真実がまざまざと感じられるのです。

人類が今後生き残るためには、きっと新しい体制や考え方が必要なのでしょうか。何が生まれても、言葉が人を支配すると同じ結果になる気がします。アートは、少なくとも数万年前から人が人であることとともにあり、常に自然体でものごとを感じ、表現して、人間同士が精神的に交わり合う手段だったように思えます。

現状で言えることは、アートが幅を利かせることが出来る世の中の方が良い世の中だと、いうことではないでしょうか。私はそう信じて、常に疑い深さと信じる力を持ち合わせたい、と思っています。